

特集：新型マツダデミオ

2

新型マツダデミオのデザイン Design of All-New Mazda Demio

前田 育男^{*1}

Ikuo Maeda

要 約

グローバルな市場で受け入れられること、かつ次世代マツダブランドの柱の一つとして、新鮮で強い存在感を持たせること。これがこの車のデザインに課せられた2つの大きな役割だった。この役割を果たすべく、新しいコンパクトカーのデザインに挑戦したのが、ここに紹介する新型デミオである。この車は国内、欧州競合メーカーが凌ぎを削る、デザイン激戦区セグメントのセンターにマツダが初めて投入するグローバルコンパクトカーであり、ユニークでマツダらしい個性を持たせると同時に、多くの幅広いユーザに受け入れられ愛されることを目指した。デザイン開発では数多くのことに挑戦し、「凝縮のダイナミズム」をデザインテーマとするダイナミックな造形を創り上げた。次世代マツダデザインのトップバッターとしての価値を創り出すことができたと考えている。

Summary

The new Demio has to be accepted in global markets and show the fresh and strong presence as one of the next generation Mazda brand pillar vehicles. Those are two major roles the design had to fulfill. To this end, we tried to develop the new compact car design. This vehicle enters into the category as a global compact vehicle where other domestic and European manufactures are engaged in fierce competition. Therefore, we aimed at expressing characters unique to Mazda and making sure that the vehicle should be recognized and loved by various customers. We took many design challenges to pursue dynamic shapes based on the compact dynamism as the design theme. We believe that this vehicle created the value as the first vehicle reflecting the next generation Mazda design.

1. はじめに

初代デミオは「小さく見えて、大きく乗れる“自由形ワゴン”」というキャッチフレーズで1996年にデビューし大ヒットした。コンパクトなミニバンというポジショニングは明解で、ゆとりの室内空間を素直に表現したBOXスタイルのデザインは新鮮だった。2代目はキープコンセプト、初代のコンセプトをキープしつつスポーティなイメージを持たせ、ブランドイメージとの融合を狙った。

この3代目をどうするか？コンパクトカーのあり方は、日本と欧州で大きく違っている。日本のコンパクトカーは室内空間の大きさを優先させ、背を高くして全長全幅を最

小に仕立てたデザインが主流。スポーティなシルエットを持つ欧州車と違い、背が高く不安定でグローバルな競合環境の中ではやや特殊な存在といわざるを得ない。

新型デミオでは、日本、世界のスタンダードになり得るスタイルを目指した。そこには現状の日本のコンパクトカーのあり方に一石を投じたいという思いもあった。コンパクトカーは、コンパクトに見え生き生きと機敏に走り回る姿が最も魅力的に見えるべきであると考えている。とはいえ、多くの制約によりコンパクトに作る、見せることは、大きく作るより遥かに難しい。その難題に挑戦したのが、新型デミオのデザインである。

*1 デザイン戦略スタジオ
Design Strategic Studio

2. デザインコンセプト

2.1 デザイン基本方針

マーケットの様々なニーズを考慮し、開発当初デザインの方向性を絞り込まず幅広いアイデアを検討した (Fig.1)。基本となるデザインのミッションは以下の2つである。

- ① グローバルに受け入れられること。
- ② 次世代マツダデザインを表現すること。

第一に、多くの提案についてグローバルに市場調査を行い、そこから得た数々の成果を融合することで市場の要求を平均的に満足させようと考えた。しかしその結果、個性もインパクトもないデザインに辿り着いてしまった。これでは、市場のリクエストには答えられても、次世代マツダは表現できないし競合力もない。

そこで、基本方針の見直しを行い「マツダらしさ」に重点を置くデザイン、つまり独自性を持ち、繊細かつダイナミックな「造形」と、柔らかな「表情」を融合させることで、グローバルに多くのユーザに愛されるデザインを追求することとした (Fig.2)。

2.2 デザインコンセプト

凝縮・洗練されたダイナミズムを表現すること。これが、このデザインの狙いである。マツダデザインDNAであるアスレティックな「動き」の表現を更に進化させ、同時に

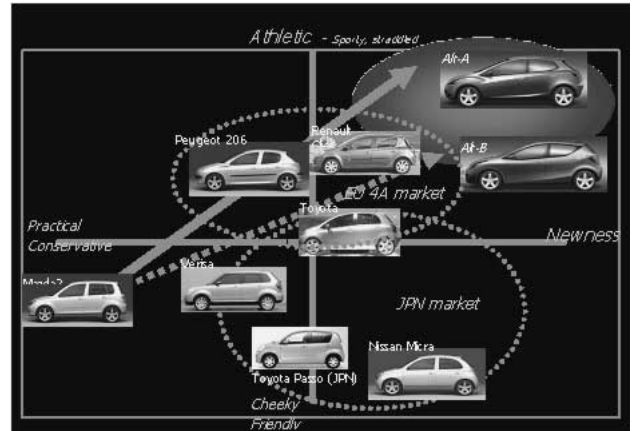


Fig.2 Positioning Map

精度の高さを感じさせる造形の作り込みを行った。

デザインコンセプトは「Exquisite & Dynamic」。

エクスクイジットとは、「精巧で練り込まれ、考え抜かれた美しさ」を意味する。すなわち、デザイナーがただ思いに任せて描くのではなく、すべてのラインや面処理などのデザイン表現、室内空間との関連を見据え、「動き」と「抑制」のバランスを考え抜いたコンパクトカーらしい「凝縮感」を感じる造形表現を目標とした。凝縮という行為は、日本固有のものづくりのアプローチであり、ここに我々のアドバンテージがあると考えたわけである (Fig.3)。

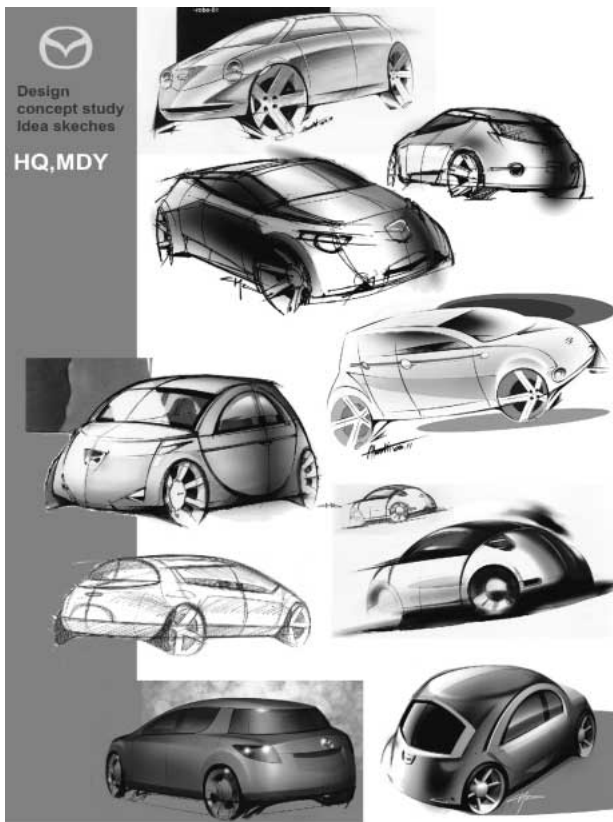


Fig.1 Idea Sketches



Fig.3 Exterior Theme Sketches

3. エクステリアデザイン

3.1 エクステリアデザインテーマ

エクステリアデザインは、次世代マツダデザインを表現するため、デザインDNAであるアスレティック表現を進化させ新しい「動き」の表現を追求した。

シルエット、ライン、光の3つの「動き」のコンビネーションで、コンパクトカーとは思えないダイナミックさと多彩な表情を創造することで、止まっても今にも動き出しそうな躍動感あふれる造形を実現。軽快で強い前進感のあるウェッジシェイプのプロポーション、Aピラーの前後でぎゅっと絞り込まれた極めて立体的な造形、RX-8を彷彿とさせるフロントフェンダアーチからポデーショルダに繋がる特徴的なキャラクタラインが、このデザインのキーフィーチャといえる (Fig.4)。



Fig.4 Front and Rear Quarter View

3.2 プロポーションと居住空間

基本のシルエットは、スリークで軽快！加えてタイヤが踏ん張って安定感のある、シンプルで明快／普遍的なもの (Fig.5)。

現代の安全性能を確保するために、最近の競合車が大きくなっていく中で、最大限オーバハングを短くし、コーナを切り落とすことで、クォータからのシルエットをコンパクトで軽快、かつ安定感溢れるものとした。この基本のシルエットを大切にしきちんと作り上げることが、きびきびとしたコンパクトカーらしさを生み出し、デザインの陳腐化を防ぐ、つまり長く愛されるデザインの基本となると考えている。



Fig.5 Proportion

3.3 造形，質感表現

我々デザインチームは、この造形に精緻で独特な質感を持たせた。

ひとつの動きから他の動きに移行する「繋がり的美しさ」を追求する。それから、繊細で変化に富んだ「光の質感」を自然でリニアに変化させるなど、ダイナミックな造形の中に、洗練された豊かな表情を与えることで、造形の「動き」「表情」をより多彩なものにした。ここは特に力を入れたところで、マツダデザインの造形レベルの高さを示すつくり込みができたと思っている (Fig.6)。



Fig.6 Surface Quality

3.4 SPORTエクステリアデザイン

SPORTのフロントデザインは、よりスポーティ度を高めるため、スタンダードグレードに対して全長を若干延ばし立体／キャラクタラインとともにセンターフォーカスで伸びやかなスピード感あふれるデザインとした。フロントバンパ下端に、強い光を受けさせることにより視覚的な重心を下げ、安定感のあるシルエットを作り出し、加えてサイドスポイラ、リヤスポイラを装着しスポーティさを強調した (Fig.7, 8)。



Fig.7 SPORT Theme Sketch



Fig.8 SPORT Front View

4. インテリアデザイン

4.1 インテリアデザインテーマ

インテリアデザインは平板な処理の多いこれまでのコンパクトカーとは一線を画す、しっかりとした厚みと動きの強い立体的なフォルムを持たせた。

タイトながら視覚的な広がりを感じさせるインテリア空間を実現するため、インストルメントパネル（インパネ）はセンターからピラーの根元（外側）へ抜けていく強い動きと、アッパーとロアに分割した立体的な構成によって「空間の抜け」を表現した。加えて視界の良さを追求したAピラー形状、低いベルトラインにより、広々とした軽快な雰囲気を生み出すことができた。一方センター部には強い量感を持たせ、頼もしい安心感を表現した（Fig.10）。

全体のイメージは、ブラックを基調としてシルバーのアクセントを効かせたコントラストにより、スポーティで個性的なテイストと楽しさを演出する一方、円形を基調とした個性の強いディテールデザインによって、フレッシュで愛着の持てる雰囲気を持たせている（Fig.9）。



Fig.9 Interior Theme Sketch



Fig.10 Interior Design Theme

4.2 心地よい空間

先代より40mm低いベルトライン高さ、適正なAピラー位置により、前席からの視界は非常に良く、乗った瞬間から違和感なく運転できるイージーなフィールを持つ。前述のインパネ造形の抜けの良さ、シートの薄さも開放感を演出するのに効果的だった。

一方力強いインパネセンター部、適度に厚みのあるドアトリムによって、上質で安心感のある空間をつくり出せた。リヤシートは、けっして必要以上に広くはないが、ヒップポイント（着座位置）、ピラー位置、フロントシート下部の空間づくりによって、外から見た印象とは全く違うゆったりとしたスペースを持っている（Fig.11）。



Fig.11 Interior Space

4.3 シンプルな機能レイアウト

インパネシフトの採用に加え、使用頻度の高いスイッチ類をなるべくドライバの近くに置くデザインとし、センターコンソールの圧迫感のない範囲だけ飛び出させた。またオーディオはスイッチ個数を減らし、一目でわかる使いやすさを狙った。インパネシフト含め、コンパクトに使いやすい操作性を実現したデザインとしている (Fig.12)。



Fig.12 Interior Layout

4.4 SPORTインテリアデザイン

SPORTのcockpitにはブラックアウトメータを採用し、質感を上げるとともにスポーティな演出を行った (Fig.13)。



Fig.13 SPORT Meter

5. カラー&マテリアル

5.1 カラーデザインテーマ

女性比率の高いコンパクトカーのユーザにとって色揃えは非常に重要である。第一に世界中のどんな景色の中でも、パッとみて人々が振り向く、ダイナミックで新鮮、インパクトのあるデザインを狙うと同時に、コンパクトカーらしい楽しさを表現したいと考えた。基本の狙いは以下の通り。

① 色自体が目立つ (人目を惹く) こと。

② その色が、デザイン意図をきちんと表現すること。

③ 晴れ、曇りなどの光の状態にあまり左右されないこと。

5.2 ボデーカラー

① ビビッドでスポーティな2色 (レッド, ブルー)

② アイキャッチでBカーらしいトレンドカラー3色 (ライトグリーン, ライトイエロー, ライトレッド)

③ 質感が高くシックなトレンドカラー3色 (ライトブルー, ブラウンブラック, ダークグレー)

加えて定番色4色という組み合わせで計12色、多彩な印象を持たせた (Fig.14)。



Fig.14 Body Color Line Up

テーマカラーは、スピリテッドグリーンとした。

この色は、ビビッドな色揃えを持つコンパクトカー競合車の中でもひと際ユニークなもので、我々としてもこの選択はチャレンジだった。どんな環境下でも目立って印象に残ること、車のデザインテーマである微妙な陰影をきちんと表現できること、この両立ができる色でありテーマカラーとして最適だと考えた (Fig.15)。



Fig.15 Exterior Theme Color

5.3 インテリアカラー

シートファブリックは4種類、豊富なバリエーションを設定した。ブラック基調でスポーティなイメージを基本とし、以下の4タイプを採用した (Fig.16)。

- A-シンプルでベーシックなもの
- B-カジュアルながら質感の高いパターン布
- C-モダンで明るい質感の高い織物+パイピング
- D-立体感の強い織物+パイピングで強いスポーツ性を感じさせるもの

デザインメインテーマとして開発したのがタイプCで、明るいシート布のコントラストが、シャープでモダンな印象を強調している (Fig.17)。

日本のコンパクトカーの世界に一石を投じるだけでなく、競合ひしめくグローバルコンパクトカーの世界でそのリーダーに成り得ると確信している。

著者



前田育男



Fig.16 Interior Color and Fabric



Fig.17 Interior Theme

6. おわりに

軽量・コンパクトというこの車の狙いに合致した「凝縮感溢れる」デザインを創ることができたと思っている。マツダのデザイナーと熟練したモデラーの技によって作りあげた完成度の高いフォルムは、国内外から高い評価を得、デザインに与えられる多くの賞を頂いた。

デザイン、エンジニアリング、マニファクチャリングなどチーム全体の力を結集することで実現したスタイリングは、グローバルに受け入れられるポテンシャルを持ち、